

# 大学教育だより



**RDHE 2013.3 No.10**  
Center for Research and  
Development of Higher Education

大阪市立大学  
大学教育研究センター  
〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138  
(全学共通教育棟5階)  
<http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/>

## 大学教育だより No.10

Voice～学生の声

文学部生・工学部生ミニ交換留学と座談会

Campus Inquiry

ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています！  
医学部医学科・医学研究科 / 医学部看護学科・看護学研究科 / 創造都市研究科

OCU Education News

市大教育ニュース！ 短期英語語学研修と English Café 等のお知らせ

Center Now & Human

大学教育研究センターの活動・研究・スタッフ紹介

## アン ロゾ (Un roseau) No.14 : 縦書き部分

三上 雅子 先生(文学研究科)

渡邊 席子 先生(大学教育研究センター)

## Voice ～学生の声

### 文学部生・工学部生ミニ交換留学と座談会

文学部人間行動学科教育学コースの学生と工学部建築学科の学生・院生が両学部での学びの違いや共通点についての座談会(2012年12月13日の午後6時から約2時間)を行いました。

それに先立って、両学部学生・院生のミニ交換留学を行いました。まず、建築学科の学生・院生が教育学コースの教育学演習(滝沢准教授担当、2回生対象)に参加し、学校選択をテーマにグループ・ワークを行いました。次に、教育学コースの学生・院生が建築学科3回生の「建築設計演習」(最終講評・徳尾野准教授担当)の発表に参加あるいは、当日の様子をビデオで視聴しました。この演習は、街中のコミュニティスクール 地域と共生する幼稚園と小学校 を設計したものを、模型と設計図を使ってプレゼンし、学内外の先生から講評を受ける授業でした。建築学科は谷口教授、企画全体は大学教育研究センターの飯吉准教授にコーディネートしていただきました。

両学部の学生・院生はもとより、教員にもいろいろな発見がある非常に有意義なものとなりました。大変盛り上がった座談会のごく一部をお伝えします。

座談会の様子

**自己紹介：それぞれの学びの様子と他学部のイメージ、関心**

【文A】今まで建築学科の人って建築家になるための勉強をしていると思っていたので、数学的な授業がすごく多いかと思っていましたよ。机に向かって、設計方法を学ぶとか、角度の計算を学ぶとか、そういうことをしているんやと思ってたんですけど、何かすごい形の教室とか、斜めの校舎とか出てきて意外でした。



あとボックスが散在している学校とか出てきて。

【滝沢】散在ではないから。(笑)

【文A】教育を専門にしているので、学校を通してみると意外に建



## 文学部生・工学部生ミニ交換留学と座談会

築って近い部分もあるなあとか思いました。人のこともすごく見ていると思いました。あのビデオはなかなか楽しかったです。

【文B】初め、建築といったら設計図を書くとか漠然としか知らなかったのですが、校舎の床とか、周りがガラスみたいなものもあって、そういう工夫も学ぶ学科なのかと、すごくおもしろく感じました。

【文C】私たちは、全員じゃないんですけど、やっぱり教師をめざしている人が多いので、私たちは与えられた、今ある学校の設備の中でどういう教育ができるのかということは考える機会があります。でも、皆さんのように、今ある学校自体を変えて、新しい教育の方法や用途というのを見つけていくという視点を、全然持ったことがなかったので、とても刺激になりました。



【徳尾野】私は建築計画という研究分野で、設計とかデザインの基礎になるような考え方とか方法なんかをいろいろ研究しています。具体的には、こういう空間と、そこの中の人の動きとか住まい方とか使い方とか、そういうものの対応関係を研究して、それをどうプランニングとかデザインに結びつけるかというようなことですね。

ですから、私はあまり物理とか数学とか全然使わないような研究で、高校のときも実は文科系のほうが得意でした。でも、建築デザインをしたいと思っていました。文学部に建築学科があったらええなはずと思っていました。(笑)それで、滝沢先生の講義に参加したら、別に建築学科が文学部にあって全然問題ないなと。エンジニアリングのほうはまあ外注に出して、デザインとかやったら全然問題ないなという気がとてもしました。



【工B】徳尾野先生の下で建築計画を学んでおります。さっきもお話があったんですけど、僕自身も今、8割文系だと思って、設計活動をしていまして、ほとんどこの校舎には僕に似た人間は少ないんじゃないかというような思っています。

前回の教育学演習のときにも、小中一貫とか、いろんな学校の新しい形という話もあったんですけども、モンスターペアレンツとか、子どものいじめの問題とか、先生方がいろいろ苦労されている点もあると思います。でも、多分、先生の問題じゃなくて、恐らく建築空間、小学校の建築の寄与するところが大きいんじゃないかなと思います。そういうことを考え始めている時期でもあったので、授業自体はすごく興味深くお聞きさせてもらいました。

【工C】研究室は谷口先生の建築構造学研究室で、いわゆる数字計算ばかりしているところで勉強しています。

この間の滝沢先生の授業に出させていただいて、話を伺ったんですけど、もともと教育にも非常に興味があって、非常におもしろく聞きました。でも、やはり教育現場は難しいというか、いろいろ問題が多いというのもあるんですけど、僕はそこから逃げて建築に来たところがあるので、文学部でそういう教育にほんまに、真剣に取り組んでおられる方はほんとにすごいと思います。

【工D】今は数学的なことをやっているんですけど、もともとはインテリアとかをやりたくて、でも数学がすごく好きで、国語が全然だめで、

理系に行きたいなと思って建築を選びました。最初入ったときはデザインにすごく興味あったんですけど、1回生のときに勉強していて一番おもしろかったのが建築構造学で、今に至っています。

この前の授業を聞いて、教育学ってあんまり考えたことなかったんですけど、皆さん2回生なのにすごいおしゃべりができるなと(笑)感心しました、圧倒されました。

### 卒業論文・演習そしてカリキュラム

【滝沢】建築学科の皆さん、私の授業の感想は。

【工C】谷口先生とかおられるのであまり言いにくいんですけど、ふだん受けている授業に比べるとやっぱり議論があるというのもあるし、

個人の意見をよく聞いてもらって、すごくおもしろかったと思います。実際、自分の意見を言うのはすごく重要なことだと思うし、ほんまに、次もやるんやったら、是非授業に行きたいなと思いました。

【文A】文学部の授業は、受け身型の授業と、あとは、さあ、グループで話し合いなさいみたいな、この間のような授業と半々くらいです、割合的には。

【滝沢】免許で国語とか英語とかは取っていますか。それはどんな感じですか。

【文C】国語の授業というのは、当てられた人が前で50分間模擬授業をするという……

【工一同】50分、すごい。(笑)

【文C】指導案を書いて、板書計画とかを全部つくって、という感じです。

それに何か意見とか、ほかの生徒役をしていた学生とか先生が、ここはこうたほうがいいと思いますとかいう感じです。

【文B】私は、教員免許を取るために日本史コースの授業を受けたこともあるんですけど、それは、何これ、何と読むの、みたいな漢文を渡されて、昔の辞典を引っ張り出して、3人グループで頑張って現代語訳して、その背景とかも調べて発表する、そういう授業も文学部にはあります。

【徳尾野】建築は違うなあ。建築は、もう何十個という科目を受け身で聞いて、設計演習で一気に出すんです。(笑)もう入れた知識をフル活用して設計するというふうな、一応そういう建前になっているんですね。

【工A】でも、設計でやってきたら教科書みたいなことはすると言われて。(笑)

【徳尾野】そう、設計の先生は言うなあ、そういうふうに。

【工A】だから、あのぐらいの作品でも、教科書に載ってるようなのはなかったんじゃないですか。

【飯吉】ほんとにみんな違いましたしね。

【工A】でも、やっぱりああいうとこで設計と発表をしようと思ったら、教科書に載ってるのを理解して、多分、自分の提案していることはどういふことがわかってないといけない、ということなんですけどね。

【滝沢】おもしろいですね。じゃ、あの発表会というのは、ほんとに1つの大きなイベントというか、大きな通過点ですか。



【工A】はい。

【滝沢】あの演習は3回生のみが対象ですか、4回生もですか。

【工A】あれは3回生です。3回生のうちに、あれが1年に4回あるんです、前期2回、後期2回と。

【滝沢】どのあたりが一番厳しいの。

【工C】やっぱり3回生が厳しい。

【工D】3回前期です。カリキュラム的に厳しいです。

【徳尾野】でも、それだけ意図があって、そうなっているわけですね。やっぱり一定の基礎知識をしっかりと身につけるといことがなければ、建築デザインにならないという、そういう考え方ですね。

【谷口】文学部の皆さんは個別の何か自分の興味をきっちと決めて、それをずうっと考えながら卒業論文をまとめていくということですか。

【滝沢】そうですね、またこれからかなり変わっていくとは思いますが、特に文学部ですと、やっぱりきちんとしたものを書いていくことが、応用力のベースになると思います。テーマは教育学であっても、やっぱり説得力のある論理、筋道の通った考え方を身につけると、いろいろな分野で活躍してもらっているのかなと思います。

【谷口】多分、僕は専門でないからわからないけど、考えるというのは言語で考えることだと思うので、何かイメージを整理していかないと考えたことにならないのかなと。だから、イメージを言語できちり定義して、やっているはずやなんけど、それがアウトプットできない者は、言語とイメージがばらばらになっていると思うので、何かあんな感じとか、こんな感じとか、それでは全然伝わってこない。

【工B】今回見もらった学校課題では、工学部の横山先生が手書き提出を指定されていて、手書きで全部描けと。あれはすごい意味のある課題だなと思います。あれは、さっき谷口先生がおっしゃったんですけど、言語化して、さらに手でイメージにして、最終的にどうやって見せるか、プレゼンテーションというようなプロセスを、今の僕たちは忘れてしまっているんだなというのをちょっと思いますね。

【飯吉】だから、横山先生が最後におっしゃったのがすごい印象的でした。やっぱりああやって描いてみると、描きながら中に自分が入り込んで、想像しながら描くというか、そういうイメージをしながら描くから、絶対ちゃんと手を使って描いてみるべきだと最後におっしゃって、あ、そういうものなんだなあと思いました。

【工C】そうですね。



## 空間 = 教育・学校をデザインする

【文A】学校をデザインするというのは、学校設置基準とかそういうのも組み入れるとか、それはあまり関係ないんですか。

【工B】そうですね、あれは一応考えないとだめなんですけど、(笑)そこまでちゃんと勉強しているやつが何人いたかなというのはあります。それどころか、建築基準法も無視しているぐらいなので。(笑)

【谷口】それぐらいやったらまだいい。物理法則も無視している。(笑)

【工C】それは建たない。

【工B】建てないですから大丈夫です。

【工A】ただ「いてる」みたいな感じです。

【文A】いつも典型的な学校じゃないですか、私たちがイメージするのは、だから、ああいう形の学校が1つでもあったら、すごくおもしろいなと思うんですけど、うまく学校設置基準に乗って、ああいう奇想天外な新しいデザインは……(笑)いけるのかなとか思ったりして。

【滝沢】でもすごく感じたのは、教育をデザインすることとほとんど同じですね、空間をデザインするというのは。

【徳尾野】そうですね。だから、学校をプランニングしようと思ったら、どういう教育のやり方をするかというのをまず決めなかったら、空間ができないんです。だから多分、教育学の人たちがいろいろなおもしろい教育の仕方を開発して、それが多分建築のほうに来たら、またおもしろい空間ができてきて、子どもたちの学習のモチベーションが上がったりとか、先生のモチベーションが上がったりとかするん

だと思うんだけど、例えば教育学と建築学がうまく……(笑)

【谷口】そういうコラボレーションを、こういう機会をきっかけに、やっぱりさせていただけたらなと思いますね。

## 交流の先へ

【谷口】それじゃ、感想を聞か。

【工B】いろいろ聞けたんですけど、一言。さっき途中で、建築学科では「人のことをすごく見ている」というのを言ってくれたのが、もうそれですごく満足しています。(笑)

【工A】空間の先に「人」を見えています。(笑)

【工B】もう使っている、(笑)さすが。

【工A】これからも、「人」を忘れず設計していきたいと思います。ありがとうございました。

【工C】本当におもしろかったです、先生にお話しできて。自分の大学にこういすごい、ちゃんと自分の意見を言える集団というか、そういう人がいるというのはすごい。改めて市大はよかったんじゃないかなと思います。(笑)



【工D】きょう改めて聞いて、やっぱり皆さん、考えがしっかりしていると思いました、2回生やのに。それもカリキュラムの問題というか、違いもあるのかなと思ったんですけど、今まで全然考えへん教育学についてもいろいろ考えられたので、非常によかったと思います。

【文C】前回と、今回いろいろなお話し合いさせていただいて、自分の中になかった建物というものであったりとか、それを通して空間であったりとか、そういう意識というか、知れたので、これからは、子どもたちのことを考える際にも、空間の持つ力というのにもちょっと興味を持って、専門の勉強を頑張っていきたいなと思いました。

【文B】工学部のことはほとんど知らないままだったので、こういう機会を設けていただいて、本当によかったと思っています。やっぱり、地域と空間というのは本当にセットであって、それに教育も準るんだということを改めて認識することができました。

【文A】1つのものでも、見る角度が違えば、こんなに意見が出るんだなというのは、前々からすごく思っていたことでしたけど、改めて人は多角的な視点を持ったほうが世界が広がると思いましたので総合大学がいいなと思いました。ただ、もっとこういうふうに触れたいなと思うところがすごくあります。自分と全く違う意見でも、その人にとっては筋が通っていたり、自分はここから見ているけど、その人は違うところから見えていたりするのがおもしろいところじゃないかなと思います。ぜひいろんな人と議論したり、いろんな人の考えをもっと聞く場所が欲しいなあと思いました。ありがとうございました。

## [インタビューを終えて]

本当に、2年から3年以上の年の差があるのに、文学部の皆さんはとてもしっかりしている印象を受けました。教員として反省せざるを得ないと感じています。工学部は詰め込み過ぎているかもしれませぬ。これからは、何ページから何ページまで自習しておきなさいと言って、雑談や討論をするようにしたほうがいいのかもいれませぬ。やはりじっくり物事を考えることは、時間や質も含めて大切なことを改めて認識することが出来ました。そういう意味で、今日はいい機会を与えていただき感謝していますし、学生の皆さんにはもっと時間を大切に過ごしてほしいと願います。

(工学研究科 谷口与史也先生)

学生も述べていましたが、教育学のイメージの中で、前提にしているもの、暗黙のうちに前提にしているものというのはなかなか壊すことが難しいと思います。でも、こういう別の分野で学んでいる学生・院生や先生方のお話を聞く機会があると、そこを壊すことができます。そのことで教育学の学生にもまた新しい、教育学としても可能性を感じてもらえたんじゃないかなと思いますし、僕自身もとても勉強になりました。これをいい機会にさせていただいて、これからも様々な形でよい関係をつくっていければと思っています。

(文学研究科 滝沢潤先生)

文責：大学教育研究センター兼任研究員  
文学研究科准教授 滝沢潤  
工学研究科教授 谷口与史也



# Campus Inquiry

ウチの学部・研究科ではこんな教育を行っています!

**医** 学部・**医** 学研究科

## 医学科1, 2, 3年生に対する早期臨床実習について

超高齢化社会を迎え、患者の年齢層はますます上昇している中、患者の立場を理解できる医師の育成が求められています。しかし、少子化、核家族化世代である現代の医学科生は、きわめて狭いcommunityでしか社会と接していないため、高齢者やさまざまな社会背景を有する患者とコミュニケーションする機会がほとんどないまま医師となり、卒業後に多くの問題と直面します。

従来から本学医学科では、1年生の夏期休暇の1日にearly exposureとして市民病院等で看護師に帯同し、医療人の勤務状況を体感させてきました。しかしその後の臨床実習は、5年生まで待たねばならず、彼らから、「学舎の隣に附属病院



third exposure より 左上:「おはようございます」。病院玄関で元気にごあいさつ。下段:初対面の患者さんとコミュニケーション。

はあるけど、どういってこなんだろう?」「医師の1日はどんなものなのだろう?」等の意見が寄せられたものです。医学科卒業後に、ほとんどの学生が臨床医を目指すため、医師の勤務実態や、患者視線を低学年時に体感させることは重要であると思われました。そこで、2005年から夏期休暇中の附属病院での早期臨床実習を拡充しました。

現在、表のとおり、2年生(second exposure)は附属病院勤務医師と、3年生(third exposure)は院内案内として外来初診患者とそれぞれ帯同させています。second

表 早期臨床実習:夏期休暇を利用して医療現場を段階的に体感

	対象	帯同	開催開始年
early exposure	1年生	看護師	1994年
second exposure	2年生	附属病院医師	2005年
third exposure	3年生	外来初診患者	2010年

exposure では医師とメールで直接アポイントをとり、third exposure では診察までの長時間初対面の患者とお話することも経験させます。これらの早期臨床実習を通して、1)医師である前に社会人となるための最低限のマナー、2)コミュニケーション力の向上が必要であると同時に、「今、そして今後何を学ばねばならないのか?」を考える契機となることを期待しました。実習後の彼らの感想を以下に列記します。

「early exposure」

白衣を着て医療現場に出るのははじめてで、ドキドキした。

看護師さんは患者さんと同じ目線で話していた。

一日中立ちっぱなしで、体力が必要だ。

「second exposure」

先生の説明で、患者さんの不安な表情が変わっていくことに感激した。

自分の将来像がおぼろげに感じられた。

何もわからない自分に先生方が、とても親切に指導してくださった。

「third exposure」

待ち時間の長さにはびっくりした。

大学病院にどんなことを期待されているかをうかがえてよかった。

「良いお医者さんになってください」と激励されてがんばろうと思った。

これらの感想から、低学年医学生に対する早期臨床実習によって、患者の立場を理解する医師をめざす自覚が芽生えることが示唆されます。本学附属病院は大都市中心街に位置するため、さまざまな社会背景を有する多彩な患者が多く集まります。「都市型大学」である本学の立地条件を最大限に活用した地域医療実習としても注目しうる取組みであると自負しています。

医学研究科准教授 首藤 太一  
大学教育研究センター兼任研究員 医学研究科教授 広常 真治

学部研究科 教育・FD 紹介



# Campus Inquiry

ウチの学部・研究科ではこんな教育を行っています!

## 医 学部看護学科・看護学研究科

### 看護学研究科におけるグローバル人材育成

本学科・研究科では以前からグローバル人材の育成に努めてきました。本学科の前身にあたる看護短期大学部や看護専門学校の卒業生にもグローバルな活躍をしている人が少なからずいますし、筆者のもとには毎年のように英文の成績証明書や卒業証明書の発行の依頼が来ています。海外の大学院で学んだり、海外の病院で勤務したりするために必要だからです。では、本学で看護学を学んだ卒業生がグローバルに活躍している様子をご紹介します。

#### デュッセルドルフ大学病院での活躍

平成15年卒業の佐藤和世さんは、ドイツのデュッセルドルフ大学病院で看護師として働いています。佐藤さんは平成11年に本学文学部(社会学)を卒業する際、卒論で取り上げた西成区健康問題への関心から、当時の看護短期大学部に再度入学し、看護師免許を取得しました。看護短大卒業後、大阪の病院で二年間勤務しました。以前からずっと海外で働く夢を抱き続けた佐藤さんは、当初、英語圏のイギリスで仕事をすることを考えましたが、諸々の事情からドイツに渡りました。

ドイツでは日本での看護師の資格が認定されず、クレフェルト市立病院で現地の看護教育 Ausbildung を受けました。

病院で働きながら看護を学ぶという方式で、学費はなく、少額の給料をもらいながら、優しいドイツ人の同僚たちに囲まれ、仕事と勉学を三年間両立させました。



国家試験の直前に起きた東北の大震災の時には、日本の復興のために同僚たちが一致団結して多くの義援金を集めてくれたそうです。周囲の人に支えられ、2011年3月、ドイツの看護師国家試験に好成績で合格し、デュッセルドルフ大学病院に就職しました。

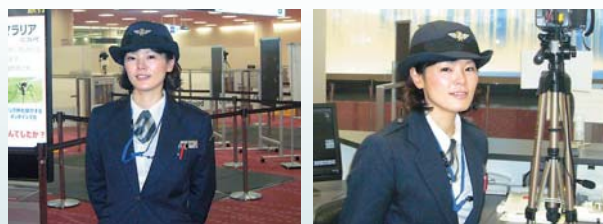
デュッセルドルフ大学病院は豊かな自然に囲まれた広大な敷地を持つ、市で最も大きい総合病院で、佐藤さんはそこでのびのびと充実した看護師生活を送っています。ドイツの公的社会保障に加入し、税金を納め、ドイツ語およびドイツの権利・法律を理解する佐藤さんは、近いうちに、ドイツおよびEU圏の永住権と労働・滞在許可を取得する予定です。

#### 東京検疫所での活躍

看護学科平成21年卒業の吉田知子さんは、現在、東京検疫所東京空港検疫所支所(羽田空港CIQ棟内)で看護師資

格を有する検疫官として働いています。空港内の一部、しかも国際線ターミナル内にあるというロケーションに最初は興奮を覚えながら仕事をしていました。検疫所の業務は、日本国内に常在しない感染症の病原体が国内に侵入することを防ぐことです。そのため、病原体が海外就航便のお客様や乗務員の健康状態を侵して入ってこないようにサーモグラフィーと目視でチェックします。

24時間空港である東京空港は、欧米系のビジネスマンや



世界中を巡っている旅慣れた方が多く、英語がコミュニケーションツールになります。「看護英語」で学んだフレーズで健康状態を確認し、健康管理に役立つ情報提供をします。しかしながら、東京空港の就航便の発着数はアジア圏への運航が多いため、日によって乗客の大半がアジア圏からいらっしゃる場合もあり、そのような時に英語以外の言語の必要性を肌身に感じるそうです。

また、日本では触れることがない諸外国の風土病やアウトブレイクの兆しのある疾病情報の収集や流行状況の情報をキャッチしておく必要があります。その際、WHOやCDCのホームページにアクセスし、自分の必要とする情報を探し、その疾病情報を職場で共有します。英語がすべてではありませんが、学生時代に学んだことや当時の思いが吉田さんを助けているそうです。

#### 医学部看護学科・看護学研究科におけるグローバル教育

お二人のほかにも数多くのグローバル人材を本学科は輩出しています。彼らの活躍の基礎となっているのが、筆者の担当する「看護英語」「英語文献講読」「卒業研究」「医療英語論文表現」「看護支援基礎科学特講」の諸科目です。廣田ゼミの卒業研究では、毎年約半数の学生が論文すべてを英語で書き、残りの半数の学生も、アブストラクトを英語で執筆することになっています。「医療英語論文表現」では、トピックを決め、ブレンストーミングし、アウトラインを書き、アカデミックペーパーに仕上げるまでのすべての過程を英語で行う指導をしています。

課題があるとすれば新修外国語でしょう。英語圏以外の外国に行くことを希望する学生が多く、彼らがもっと自由に外国語を履修できるよう、さらに多くの新修外国語科目を提供し、グローバル・コミュニケーションが取れる卒業生をより多く輩出したいと考えます。

大学教育研究センター兼任研究員 看護学研究科 廣田 麻子



# Campus Inquiry

ウチの学部・研究科ではこんな教育を行っています！

## 創造都市研究科

### 社会人になっても、 学び直しが出来る大学院の場を、梅田に

#### 「都市」をコンセプトにした社会人向け大学院

大学を卒業すると、勉強も終わるという訳ではありません。社会人としてバリバリに働いている時でも、学ぶ事は続きます。大学で学んだ事を更に深く学び直したい、仕事に取り組んでいく中で新たに学ぶ必要が生じた、社会人として今まで頑張ってきた事を振り返って知識を整理したい等、学ぶ動機はいくらでもあります。

創造都市研究科は、忙しい社会人が働きながら通える大学院です。大阪・梅田を拠点として、2003年4月に開校し、この春で10周年を迎えました。文化・芸術・学問・思想・ビジネス・生活スタイル等の切り口から、関西を中心とした都市や地域を元気にするべく、その担い手が集い研鑽を重ねる場、それが創造都市研究科です。

そもそも大阪市立大学の源流は、日々仕事にいそしんで経験を積み重ねてきた商人を対象に、ビジネスの専門知識を教える大阪商業講習所にあります。そこでは、簿記や作文習字、算術、英語/中国語、商業の歴史、日本経済論、銀行論、法律、実地演習等のカリキュラムが提供されました。そして国際的にも競争力のある工業を興し、商売を盛んにする事で、日本を元気にさせる人材を育成して参りました。

あれから130年を超えた現在、創造都市研究科は、日々仕事にいそしんで経験を積み重ねてきた社会人を対象として、専門知識を提供しているという点で、大阪商業講習所の開所の精神を引き継いでいるといえます。とはいえ、私達を取り巻く環境は大きく変化しました。創造都市研究科は、時代の変化にあわせて、多様な観点から都市と地域を元気にするドライビング・フォースを育てております。その観点は既存の枠にとらわれない専攻や領域として、修士課程は、都市ビジネス、都市政策、都市情報学の3専攻、博士(後期)課程は、都市政策、国際地域経済、事業創造、共生社会創造、都市情報環境という5つの領域から成り立っています。

ほとんどの講義は、大阪駅前第2ビル6階にある梅田サテライトキャンパスで実施しています。平日の夜間と土曜日の日中に講義やゼミは行われ、総勢で約300名の大学院生が学んでいます。

#### 創造都市 名物「ワークショップ」

創造都市研究科の大学院生は、職場で抱えている問題に対して、何か解決の手がかりを得たいとか、将来を見据えて今までは違う課題に取り組みたい等といった目的を抱いて梅田に集い、研鑽を重ねております。これらの目的を達成する道標になるよう、ワークショップという教育方式を提供しています。各分野で活躍されている方を講師にお招きして、「いま・これからの問題」をお話し頂き、そこから問題の本質を学び、大いなる啓発や感化を受ける場です。様々な知識を得るだけでなく、ゲスト講師との約1時間に及

ぶ質疑応答や、学んだ事について教員と一緒に積極的な議論を行う中で、実際の「ホンネ」の部分に迫っていきます。



創造都市研究科の中でも、都市ビジネス専攻のアントレプレナーシップ研究分野では、自ら創業した経営者や創業支援者等を講師に迎えて、ワークショップが行われています。受講生は、経営のポイントや起業家に求められる資質、直面する経営課題やその対処等についての理解を深め、自身の起業や事業に応用する力を磨き上げております。のせている2枚の写真は、当分野のワークショップの様子を写したものです。この日は、お客様志向で高い収益を上げることができるビジネスの仕組みを、どのようにして創ればよいのかについて、Google や ZOZO TOWN 等の事例を使いながら考えていきました。



このようなワークショップを通して、ビジネスに対する思いの強さや心の葛藤に迫る事が出来たであるとか、当たり前のようにこなしてきた仕事に対して何故を問う事の意義、多角的な考え方による固定観念からの解放、データに基づいて語る事の大切さ、リッチな情報を引き出す質問の仕方等について、考え直す機会が得られたという受講生の意見も頂いております。

#### 都市の創造活動を担う人達に

目先の実用的な知識だけではなく、深い学識に裏打ちされた基礎的な教養を身につける。そして、それを日々の実践とすりあわせ、都市と人に関する深い洞察力を養う。創造都市研究科は、そのような働きながら学ぶことが出来る場を用意しております。

大学教育研究センター兼任研究員  
創造都市研究科都市ビジネス専攻准教授 小沢 貴史

学部研究科 教育・FD 紹介



## 市大教育ニュース!

国際センター主催(3月実施)

### オックスフォード大学 ハートフォードカレッジ 短期語学研修プログラム



Hertford College, University of Oxford (英国)で過ごす春休み



### イギリスを代表する大学都市、 オックスフォードで英語力をアップしませんか?

オックスフォード大学ハートフォードカレッジは、最古のカレッジの一つで、とても趣のある格式高い雰囲気の中で英語が学べます。熟練した講師陣と、オックスフォード大学の学生との触れ合いを通じてかけがえのない時間を過ごしましょう!

費用	60万円程度
参加者	30名程度
引率者	1名予定



英語教育開発センター主催(3月実施)

国際センター主催(9月実施)



### ビクトリア大学 短期語学研修プログラム

English Language Centre, University of Victoria(カナダ)で過ごす夏休みと春休み

## English Café

Open中!

English Caféには15台のPCが設置されているほか、英語の新聞や雑誌、CD、DVDなどが置かれています。英語を学びたい学生であれば、だれでも自由に利用できます。場所は全学共通教育棟(8号館)5階です。

OFFICE HOUR

ネイティブの先生と楽しくおしゃべりしませんか!



English Caféでは、月曜日、木曜日の午後4時30分から1時間、OFFICE HOURを設けています。この時間にネイティブの先生がみなさんをお待ちしています。なにを話すのも自由。楽しい時間をお過ごしください。

興味のある方は英語教育開発センター  
(全学共通教育棟5階)まで

## ALC NetAcademy2

English Caféでも自宅でもNetAcademy2が利用できます。

(自宅での利用法は全学ポータルサイトにログインし、「お知らせ」「学生掲示板」「全学対象のお知らせ」にある「ALC NetAcademy2の自宅からの利用法について」を参照してください。)

ALC NetAcademy2は、初級者から上級者まで幅広いレベルに対応したネットワーク型学習システムです。2006年5月リニューアルのTOEICテストにも対応しています。

大阪市大の学生は1年次と2年次にCollege Englishを履修します。

College English(CE)は1年次はネイティブ・スピーカーの教員が授業を担当(一部例外あり)、1クラス25名程度の少人数制といった特徴がある英語のクラスです。

英語教育開発センター



## 大学教育研究センターは「こんなこと」に「こんなメンバー」で取り組んでいます！

### FD活動

#### (1) FD研究会(年1回)

FD研究会は、大阪市立大学における教育の向上を図るための組織的な研修や教育に関する研究活動の成果に関し、全学的交流を図る場として設定されています。例年、100名前後が参加してきた大きな研究会です。2012(平成24)年度の全体のテーマは「大阪市立大学における「グローバル人材」育成の未来像を探る」でした。



#### (2) 教育改革シンポジウム(年1回)

教育改革シンポジウムは、全学的に共有が可能なホットピックについて、大学内外の情勢を鑑みながら考えを深めることを目的に開かれています。第19回目を迎えた2012(平成24)年度は、「本学の国際化、グローバル化に対する教育研究のあり方」をテーマに開催し、西澤学長と中川国際センター所長に講演をしていただきました。



#### (3) FDワークショップ・大学教育研究セミナー(年数回)

FDワークショップと大学教育研究セミナーは、ワークショップ形式またはラウンドテーブル形式等を取り、主に学内の参加者間で授業デザイン事例など教育実践事例や大学教育にかかわるホットピックの紹介とそれらについての意見交換を行う場として設定されています。

### 研究成果の発信と広報

#### (1) 大阪市立大学大学教育研究センター紀要『大学教育』

主として本学の教育に資する研究成果の発表の場として、学内はもとより全国から投稿を募り、年に1~2回発行する、査読付きの学術雑誌です。センターのFD活動・研究活動の報告の場でもあります。

#### (2) 大学教育だより & Un roseau(アン ロゾ)

教員および学生を対象として、大阪市立大学におけるさまざまな教育への取り組みをまとめた広報誌『大学教育だより』を年1~2回発行してきました。また、大阪市立大学での学びの道しるべとして全学共通教育総合教育科目ガイドブック『アン ロゾ』を発行し、学生のみなさんに配付してきました。2006年度からこれら2冊を合冊として、より充実した内容として発行し、一層幅広く配付しています。

### センターの研究活動

#### (1) 本学の学士課程教育のあり方と示し方に関する調査研究

本学には8つの学部があり、それぞれの特性を生かした教育が行われています。一方で、総合大学である大阪市立大学の特徴を生かした教育を展開することも重要です。専門性と総合性を備えたカリキュラムは複雑な形にならざるをえない部分があるため、その全体像と各授業の位置づけを、受講生にはもちろん、市大への入学を目指す受験生や市大に関心をもつ学外の人々にわかりやすく示す必要があります。

そのため大学教育研究センターでは、専任研究員が各学部を訪問して、各学部での教育の取り組みについてヒアリング調査をしたり、各学位プログラムでの学び方をどのように説明しうるかについて検討したりしています。その成果は報告書としてとりまとめています。

#### (2) 教育実践研究・カリキュラム開発研究

大学における教育の焦点が【教員が何を教えたか】から【学生が何を学んだか】へとシフトする中、大学教育研究センター専任研究員が担当する授業の場などを活用して、さまざまな教育実践研究が行われています。近年のホットピックスは、思考力・キャリアデザイン力育成のための教育プログラム開発研究、アクティブラーニング(学生参加型)教授法の開発研究、学習成果評価方法の開発研究です。研究成果は、ワークショップ等で報告されたり、『大学教育』に研究論文として掲載されたりしています。平成25年度後期開設予定のグローバルコミュニケーションコースのデザインにも、これらの研究成果が反映されています。

#### (3) 本学の教育改善・FDに関する調査研究

本学の学生が真に学ぶための教育を実現するためには、本学の教員・職員・学生からなる全構成員が、本学の理念や教育目標を共有し、その実現のために協力し合うことが重要です。センターでは、FD(ファカルティ・ディベロップメント)を、本学の教育の質の維持と一層の向上のための、構成員全体の自律的で組織的な取組として捉え、各学部等で近年急速に活発化している教育改善・FDの取組への協力支援を行っています。また、本学の教員が、教育やFDに日常的にどのように取り組んでいるか、考えているかを知り、それらを教員相互や大学全体の教育改善に活かすために、教員の意識調査とその研究なども成果を報告書に取りまとめています。

#### (4) 大学院教育のあり方に関する研究・協力

センターでは、大学院における教育のあり方についても研究を進めています。将来、大学教員をめざす大学院生のための大学教育実習制度の構築や実施に協力したり、大学院の研究科を超えた共通科目の可能性などについて検討したりその実施に向けた支援をしたりしています。

#### (5) 学内の教育研究ニーズに基づく研究

上記以外に、入学者の追跡調査及び分析を行い、今後の本学の入学者選抜を始めとする学生受け入れ体制の検討に資することを目的とした調査、あるいは理学部物理学科と共同で全学共通教育の物理学の実験科目の一部について授業方法と学習効果の関係について検討するための調査、英語教育開発センターの依頼に基づくカレッジイングリッシュプログラムのデータ分析・検証など、学内ニーズに基づく各種調査・研究活動を展開しています。

## 大学教育研究センター紹介



### 大学教育研究センターの研究

大阪市立大学 大学教育研究センターは、大学を取り巻く新しい環境の中で、社会の進路を見据えた大学教育のあり方を実現することを目指して研究と開発をすすめるために設立されました。

右記の3本の柱を基本に据えつつ、相互に強く関連をもつ各種プロジェクトに取り組んでいます。

#### 高等教育の制度や その役割についての研究

- (1) 学士課程教育システムのあり方
- (2) 学生相談・学習相談システムのあり方
- (3) 社会における大学のあり方
- (4) 生涯学習社会における大学のあり方

#### 全学的FD活動 各種研究プロジェクト

#### カリキュラム・教育方法の 開発に関する研究

- (1) 学士課程のカリキュラムおよび教育方法の開発
- (2) 初年次教育カリキュラムのあり方
- (3) 授業改善支援システムのあり方

#### 大学教育の 評価および教員評価の あり方に関する研究

- (1) 大学教育評価のあり方
- (2) 大学教員評価のあり方
- (3) FD活動のあり方

### 大学教育研究センタースタッフの紹介 (平成25(2013)年3月現在)

#### 所長 .....

桐山 孝信  
副学長

#### 専任研究員 .....

大久保 敦

副所長 大学教育研究センター教授  
研究分野: 高校大学の接続 / 科学教育 / 古植物学

西垣 順子

大学教育研究センター准教授  
研究分野: 大学教育の評価に関する研究 / 教育心理学

飯吉 弘子

大学教育研究センター准教授  
研究分野: 社会における大学のあり方に関する研究 / 教育学 / 大学教育史

渡邊 席子

大学教育研究センター准教授  
研究分野: 教育支援システム  
の開発 / キャリア教育 / 社会  
心理学

#### 兼任研究員 .....

中瀬 哲史

経営学研究科教授

加藤 司

経営学研究科教授

松本 淳

経済学研究科准教授

橋本 文彦

経済学研究科教授

中島 義裕

経済学研究科教授

森山 浩江

法学研究科教授

滝沢 潤

文学研究科准教授

井狩 幸男

文学研究科教授

海老根 剛

文学研究科准教授

高橋 太

理学研究科教授

飯尾 英夫

理学研究科教授

荻尾 彰一

理学研究科准教授

谷口 与史也

工学研究科教授

鳥生 隆

工学研究科教授

広常 真治

医学研究科教授

廣田 麻子

看護学研究科講師

服部 良子

生活科学研究科准教授

三船 直子

生活科学研究科教授

小沢 貴史

創造都市研究科准教授

岡崎 和伸

都市健康・スポーツ研究センター准教授

#### 事務局 .....

垣谷 篤

学生支援課長

福井 恵美子

学生支援課員



#### 編集 後記

『大学教育だより』は大阪市大の教育的取組や学習活動に関する広報誌であり、『アン ロゾ』は全学共通教育総合教育科目ガイドブックです。これ等に加え別冊として『新入生のための授業選び案内』も発行していますので、とくに新入生の皆さんは、是非合わせて目を通していただければと思います。

今回の『大学教育だより』「VOICE」欄では、文学部

教育学専攻および工学部建築学専攻の学生の皆さんが、互いの授業に参加した上で、それぞれの学問の違いと共通点について2時間近くにもわたって話し合ってくれました。教育と建築とはかなり異なる分野のように思えますが、「人」を基軸として教育や空間のプランニングするといった共通項も見えました。各部局の最近の教育的取組欄については、医学部医学科・看護学科・創造都市研究科の3つの学部・研究科が紹介をして下

さいました。総合大学で学ぶことの意味を実感するためにも、自分の学部研究科はもとより、他学部に関する記事も是非読んでみて下さい。

『アン ロゾ』は、文学研究科の三上先生、大学教育センターの渡邊先生が、新入生を初めとする学生の皆さんに、大学での学びのあり方について語りかけて下さっています。是非こちらもゆっくり読んでみて下さい。(飯吉)